辭世脇起六句首尾行

はち〳〵と絞り溢すや萩の露　五堂居士
や、さむの夜の月もなき庭　男 五岳
長入の腐風呂に迄か、み見て　妻 辰子
芝居はなしに出來た隔て氣　姪 かつ子
はなに友神門を横に道よきり　甥 好水
茶けふりさへもあをき草餅　孫 五雄

入る月の青海や露にます光り　羽洲
散露の光りやあとかあと迄も　甫

風交深かりし五堂老人身まかりしをことゝし
開て其の家に後主五岳君を訪嘉蕭など仕つ

魂祭るくるりや餘も五色の名　十水
遂ちりて水音高くきこゆけり　多賀女
水影のちりて猶は澄む柳かな　松霧
こはすの手に殘る句ひや菊の露　芹雨

惜いかな〳〵このこはれはき　梅晴
土用干するや名殘を云ならへ　柿軒
きへ際の光りをのこす螢かな　居静
手にうけて其いろ惜む一葉哉　梅庭
まくるゝやて昔しと成し菊の花　壽竹
遂のの實の飛てはかなき夕部哉　笑柳
思ひきや冬をも待すちる紅葉　夏椎
露散てせきあへす袖ぬらし泉　斗涼
肌寒く成ろや袂のぬれてから　梅岳
獨り行君の心やいかならん
身にしむ風の音をき、つ、　よし子
萩ちつたあとの光りや露の玉　樗堂
きくたひに思ひの増や秋の鐘　清齋
この花をちらすはいかに初嵐　一筆
散露や拾はれそうに思はれる　梅鳥
露[illegible]らす[illegible]はいつれの名殘哉　五石
露寒しかはる便りを聞にさへ　蝸居
月落ちて光りの増すや玉の露　五洞
時ならぬ風とはしらす溢れ萩　五村
西へ行雲もかしや秋のそら　五畝
聞入れはまきりに詫し露の音　五明
佛もこはれて消えぬ露のたま
くとたに筆の御影と類しも　五翠
かいまは涅槃の雲にかくれて　五峯

おけた夜のこれか堤か柳ふく　五堂
雪解のいろのぬけし川みつ　羽洲
尾頭らのおまるの鯖の荷を次て　五堂
よふも答へもよくとはろ藤　羽洲
眞直にありたき月のまわり縁　五堂
ひやつくうちに霧雨はやむ　羽洲

下略

はち〳〵と絞り溢すや萩の露　五堂居士
かけまたはしき入かたの月　好水
清炭の火を譲り合ふや、窓に　壽竹
旅のはなしは開き味のあろ　梅岳
汐干狩野飼の駒も出てあそひ　快笑
雨にもならぬ春の疊もり氣　一筆
海栄は鉢うゑなから能く咲て　夏椎
老ては子にもしたかふか道　笑柳
五三人個入つた風呂か湯の加減　柿軒
女きらひと言ふはいつはり　梅庭
商ひは余所目斗の奈良かよひ　節水
かきにはしたるあせの帷子　松軒
うち水にぬれてひと聲月の蟬　斗涼
鍵を鳴らしてまはる戸締り　居静
勝に出た碁の一手から座か崩れ　紫樓
急くかま、に手紙見もせす　春耕
散花のすか〳〵敷は神そとや　甫
御影供ころの日脚のろ〳〵　筆

夜嵐にちりてあとなし桐一葉　好水
か、るよの風に悲きす、き哉　勝子
消へて行く且のつゆの名殘哉　たつ子

まひとたび咲は[illegible]の散殘と父五堂の病吟も重き病に老體衰弱すへなく七十有六齡を一期として去る丑の秋の朝嵐に誘はれ葉草の露と共に消にけり別情に遲速のわかちを覺えす只茫然たる折からをちこちの俳友諸君より弔悼の玉吟を惠まれしを手向露の泉下の思ひは我其厚情に感涙の袖を絞るか如くならんと高諸君に鳴謝するを表し寫經飛達にかね猶靈を祭るになん

草の露消る物とは知らさりし　五岳